

## 1 研究の内容

### (1) 研究テーマについて

多様な他者と関わり互いに理解し合おうとするとともに、地球に生きる一市民としてグローバルな視点をもって考え行動しようとする子どもの姿を目指し、2018年度より本テーマのもとで研究を進めている。

ここでの「グローバルな視点」とは、「世界の様々な文化や習慣、価値観を尊重し、様々な背景をもった人々と共に生きていくための広い視野」を示す。本部会で目指している具体的な子どもの姿は、下表の通りである。

- 身近な事象について、異なるものと出会い体験することによって、自分のことばや文化と比べながらそれぞれの特色をとらえようとする
- 多様な価値観があることを、体験を通して知り、それぞれを大切にしようとする
- 自分と「世界」との関わりを見つめ、「世界」に生きる一人として行動しようとする

今年度、新学習指導要領の施行に伴って高学年における外国語科および中学年における外国語活動がスタートし、日本の小学校における外国語教育は新たなステージに入ったと言えるだろう。学習指導要領解説には、今回の改訂について、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、(中略)生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」ことがその趣旨の一つであると述べられている。こうしたグローバル化する社会を生きる人材育成のための外国語教育については、長年にわたって様々な提言がなされている。例えば「グローバル人材育成戦略」(グローバル人材育成推進会議, 2012)ではグローバル人材の要素として、語学力・コミュニケーション能力/主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感/異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーが挙げられている。また、「小学校における英語教育について 1 小学校における英語教育の現状と課題」(文部科学省, 2006)においては、グローバル化する様々な状況を挙げながら、「絶えず国際社会を生きるという広い視野とともに、国際的な理解と協調が不可欠」であるとともに、「異なる文化・文明の共存や持続可能な発展に向けての国際協力が求められるとともに、人材育成面での国際競争も加速していることから、学校教育において国家戦略として取り組むべき課題として」外国語教育が挙げられている。いずれの提言においても、グローバル化に際して、広い視野をもち、国際社会の一員として、多様な他者と理解し合い協調して生きていくために外国語教育が重要な役割を果たすという見方が表れている。

つまり、ここで見てくるのは多文化共生の社会における国際理解を目指すものとしての外国語教育であり、それは本校が目指す子どもの姿にも重なると考える。そうしたことを踏まえ、本部会では次の二つの課題について考えている。

一つ目に、「外国語によるコミュニケーション能力」の育成についてである。これは、国際理解・異文化理解の態度と外国語を運用する力とが両輪となって支えることによって成り立つものと考えている。これらは、相互に往還し合うととらえているが、この両輪を育成するような学習にはどのような可能性があるのか。また、どのような学習活動が行われ得るのか。

二つ目は、「外国語」についてである。学習指導要領において外国語教育は「原則、英語で行われること」と限定されている。たしかに英語は「国際共通語」との声も大きく、長きにわたってグローバル化＝英語使用の需要の増加という構図はひろく支持されてきた。しかし、例えば2018年の訪日外国人のうち英語圏出身者は1



割に満たず、貿易に関しても輸出入総額にはそれほど大きな増加は見られない。翻訳機の発展や、他言語（中国語、スペイン語など）の台頭、英語使用者の統計などをもとに、中長期的に英語が国際共通語としての存在感を失っていく可能性を指摘する言語学者も少なくない。そのような状況の中では、「外国語」のとらえ方に柔軟性をもたせる必要があるのではないか。「外国語」をひろくとらえた学習の可能性を探りたい。

以上の課題について、今年度は、世界の文化や習慣を自らのものと比べながらその類似点や相違点を考えたり、その背後にあるものをとらえようとしたりする子どもたちの姿を大切にしながら、外国語を使った言語活動とのタイアップの仕方や「英語学習」のとらえ方とその比重の置き方について考えながら、研究テーマにせまることにした。

## （２）研究主題「学びをあむ」との関連

子どもたちが外国語との出会いや外国の人々との出会い等を通して感じたこと、考えたことをもとに自身を見つめ直し、そこで生まれる新たな視点で学びを重ねていく姿を、外国語学習における「学びをあむ」姿ととらえている。学びを重ねていく際には、子どもが自ら学んだことを活かして活動をつくったり、友達や様々な他者と協働したりする中で新たな発見をし続ける。時に、そうした学びは絡んだりほぐされたりすることもあるかもしれないが、そうした経験も自己の更新へとつながる。そこで更新された視点によって、問いが更新され、さらなる探究へと学びが発展していくことが「学びをあむ」ということであると考え。

## （３）研究の視点

言語学習を「ことばの学び」ととらえたとき、「ことばを学ぶ」「ことばについて学ぶ」「ことばを通して学ぶ」という３つの学び方があると考え。「ことばを学ぶ」とは、いわゆる言語の技能を身につけることを目的とした学習を、「ことばについて学ぶ」とは、言語や言葉の背景にある文化、言語の機能の学習を意味する。そして、「ことばを通して学ぶ」とは、その言語を使用してコミュニケーションを図ることによって感じたり体験したりしたことを意味づける学習のことである。外国語の学習においてもこれらの学びがあり、３つの学び方は上述したような子どもの姿にせまるために重要な役割を果たすと考える。このような学びが起こるよう、授業では以下の３点を柱として活動を行うことにしている。

### ①「ことば」への「引っかかり」を広げる

「ことばを学ぶ」際、英語に限定せず様々な言語に触れることができるようにする。そうすることにより、子どもたちが日本語も世界で話される言葉の一つであるということに気づき（あるいは再認識し）、音や文構造などにおける他言語との相違点や類似点を見つけたり、物事のとらえ方にも違いがあることに気づいたりする体験を大切にする。そうした体験は、日本語を相対化することにつながり、認識を更新したりことばの奥深さに気づいたりすること、また、ことばの学びをさらに深めていこうとする学習者を育てると考える。様々な言語に触れることにより、徐々に子どもの言語感覚がみがかれ、子どもたちも生活の中で自ら様々な気づきをもったり題材を見つけたりすることができるようになることを期待している。

### ② 自分とのつながりを考えながら「世界」をとらえる

「ことばについて学ぶ」ことを通し、広く世界に目を向け、様々な文化・歴史的背景をもった人々が共存する社会に生きていることに気づくとともに、互いのよさを大切にしながら共によりよく生きていこうとする子どもを育みたい。様々な学習活動の中で他国の文化や習慣に触れる際には、日本のそれらを常に比較するようにしている。そうすることにより、子どもたちは、そこに生きる人々の立場に自分自身を投じて考えようとする。そして、そのようにして他国を見ることにより、それぞれの国、人々に各々の「当たり前」があり、そうした人々から見たら自分自身も「外国」に生きる人で、自分にとって「当たり前」の言葉や文化はどのように見られているのだろうかと考えようになる。そこから、それぞれの特色を受容しようとしたり、共感的に理解しようとしたりすることができるようになっていくことを期待している。

### ③ 関わりの中で試行錯誤する

「ことばを通して」、自分と異なることばや背景や考えをもつ他者を受容し、積極的に関わり合おうとしたり、臆せず自分の思いを伝えたりしようとする態度を育てるとともに、体験を通してその方法を学ぶことができるようにしたいと考える。学級の友達同士、ALTや本学で学んでいる様々な国からの外国人留学生、また、他国に暮らす同年代の子どもたちとの交流活動を通して、うまく伝え合うことのできない体験から言葉を補う様々なコミュニケーション・ツールの存在や相手によって配慮すべきことが異なることに気付いたり知ったりすることで、その意義を実感することが重要であるとする。

## 2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

今年度は、コロナ禍によりこれまで行ってきたような交流活動を十分に行うことができず、特に前述した③の視点については限定的な体験となってしまったことが非常に残念であった。そのような状況の中で行っていたいくつかの活動について、前述した3つの視点と照らし合わせながら紹介する。

### (1) 「“Did you know?” ～世界の〇〇を比べてみたら・・・～」(第5, 6学年)

#### ②自分とのつながりを考えながら「世界」をとらえる

休校期間中の課題の一つとして、世界の様々なジャンルについて特色のあるものを調べて比べ、まとめたものを分散登校の際に発表し合うという活動を行った。子どもたちは、自宅で教科書(啓林館“Blue Sky elementary”)の各Unitの最終ページのコラムを読み、掲載されている“Did you know?”(図1)を参考にしてそこから興味をもったジャンルを選択し、インターネットや書籍で調べ、画用紙にまとめた。その際教師からは、日本語や日本の場合を意識して比較するよう示した。

分散登校期間に、それらを共有した。集まったのは、5年生が年中行事、記号、学校での昼食、日本語と英語で似ている言葉、人の氏名、食事の仕方やマナー、禁止を表す表示、英語のようで英語ではない言葉、6年生はアルファベット3文字で表されるもの、外国で日本語のまま定着したもの、標識やピクトグラム、世界の夏の楽しみ方、ジェスチャー、単位、職業、スポーツなど、多岐にわたった。例えば、6年生で「外国で日本語のまま定着したもの」を選択した子どもは、Mottainaiを紹介した。

教科書に示されているのは matcha や wasabi など食べ物に特化していたが、それに留まらず、環境部門で初めてノーベル平和賞を受賞したケニアの Wangari Muta Maathai が提唱した言葉を選び、その背景や、世界でひろく使われている様子を紹介した。この話題に初めて触れる子どもたちも多かった様子で、「日本人のもったいないという言葉が世界の人に使われていることはうれしい」「『もったいない』という言葉と感覚が日本のものとして世界に広まっているということを知って、日本が食品ロスの問題をかかえているのははずかしいと思った」などといった感想があった。

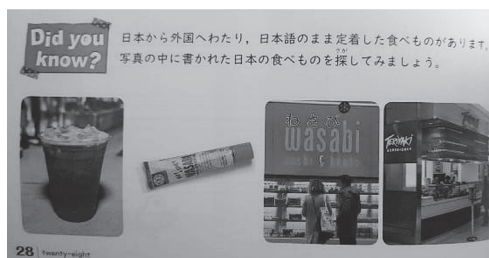
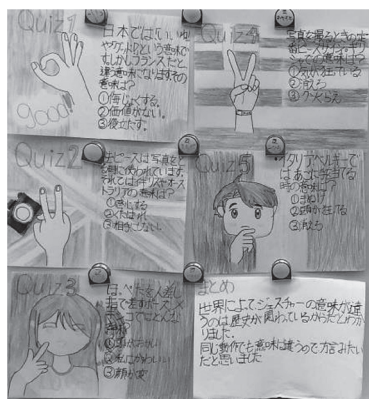
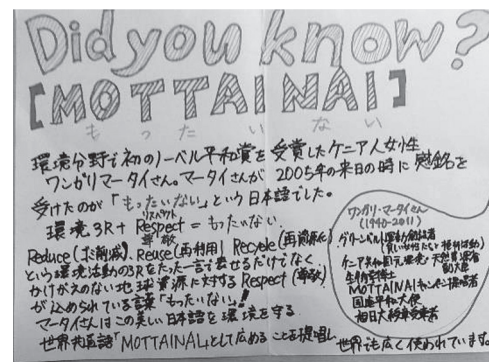


図1 “Did you know?”(6年 Unit 2)



また、ジェスチャーについて紹介した子どもは、同じ仕草でも意味が日本と異なる世界のジェスチャーを集め、クイズ形式にして発表した。これまでに学習した“this is Italy.”や“The answer is No.2!”などの英語表現も遣いながら、絵や写真を用いて伝えていた。これについても反響は大きく、「同じジェスチャーでも場所によってちがう意味をもっていることがあるなんて初めて知って驚いた」「写真を撮るときにピースをしてそこにいる現地の人にはぶじょくしていると思われたら大変」「日本とは違う意味のジェスチャーだって知らないでやっていると、相手には『知らなかった』とは伝わらないから、ちゃんと違うことを調べておくことが大切だと思った」などの声が挙がった。



実際の関わりの中からの学びとはならなかったが、このように友達を発表を通して異文化と出会い、自身の行動や自らの「当たり前」を問い直したり、相手の「当たり前」が自分と違う可能性があることを認識しながらコミュニケーションを図ることの大切さについて考えたりするきっかけとなったようだ。

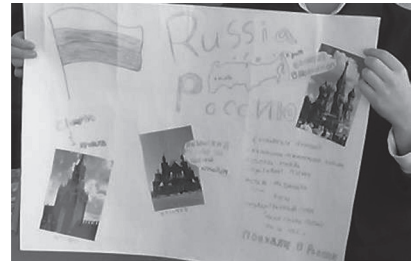
## (2) 「Let's go to Peru! ～現地のことばも使って行きたい国を紹介しよう～」(第5学年)

### ①「ことば」への「引っかかり」を広げる

一斉登校が始まり、誕生日を伝え合う学習(Unit 1 My birthday is May 10th.)をした子どもたちは、その活動の中で様々な言語における12ヶ月の表し方について調べ、共有した。そこで出合った様々な文字や多様な「月」の表し方に興味をもち世界各国への関心が高まった様子がみてとれたため、行きたい国を紹介する活動(Unit 6 I want to go to France.)へと移った。導入の際に様々な世界遺産が挙げられる中で、「自由の女神」の英語表現を子どもたちと予想した。「自由だからフリーが入っていそう」「女の神・・・ガール・ゴッド？」などという声を受けたうえで、すでに知っていた子どもが“the Statue of Liberty”「自由の銅像」という表現を紹介すると、子どもたちからは「『女神』はどこにいった？」という疑問の声が挙がった。同様に、中国の「万里の長城」は英語では“the Great Wall”「大きな壁」と表現されることを知ると、「でもこれはもともと中国のものなんだから中国語では『城』が入っているのかも？」という声があったため、皆で調べた。すると、「万里长城(Wànli Chángchéng)」ということで、日本語は中国語での名称をもとにしていること、そして読み方もやはり似ているということが確認された。



このような体験を通し、行きたい国を紹介する活動では現地の言葉を使うことにした。“Let's go to China. You can visit 万里长城(Wànli Chángchéng).”という調子である。準備段階では、子どもたちは同じ国を紹介する仲間が集まり、タブレットを使いながら現地の言葉の音を確認めながら一緒に発音したり、その文字を真似してポスターに書いたりした。そしてそのように準備したものを使い、「旅行代理店フェア」として発表活動を行った。発表会を終えた子どもの感想には、それぞれの国や地域の特色への関心が表れていたのと同時に、「ケニアの発表を聞いて、ライオンのことをシンバ(Simba)と言っていてびっくりした!『ライオンキング』のシンバは『ライオン』っていうそのままの意味だったんだなと思った」「オーストラリアの『ウルル』というのは英語ではなくて原住民の言葉だと知った」などと、現地の言語についてのふり返りも多く挙がっていた。



## 3 今後に向けて

今年度は、実際に外国語を使う人々との交流活動を行うことはできなかったが、教室の中でことばに引っかかりながら学んだり、ことばについて学んだりする子どもの姿をみることができたのではないかと考えている。しかし、今年度は英語を中心とすることの必然性を理解したうえで国際理解教育とのバランスを考えるというところには至らなかった。今後も引き続き、英語を中心とした「言語活動」と「国際理解」が互いに影響し合う学習のあり方を考えていく必要があると考えている。(濱)

### (参考文献)

- ・鳥飼玖美子(2018)『英語教育の危機』ちくま新書
- ・大山万容(2016)『言語への目覚め活動—複言語主義に基づく教授法—』くろしお出版
- ・寺沢拓敬(2020)『小学校英語のジレンマ』岩波新書
- ・グローバル人材育成推進会議(2012)「グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議のまとめ)」
- ・文部科学省(2006)「小学校における英語教育について 1 小学校における英語教育の現状と課題」